

アキノマド

詩&曲: 原口雅樹 = Fura

「暮れ惑る、街灯に映る 唄、朽ち果れた蟬の七骸に
鈴虫のレクイエムが響く

色がき始めた 花水木の葉が ランプの灯火に浮かぶ、
どうやら ここが秋の入口

時廻り枯れ散る定めたら 目覚を許された 眠りたら
枯れ染める宴に捧げる」

「それぞれの色彩を纏い、それぞれの約束の地面に
並べられて行く 落葉

時を止め、舞い落ちる枯葉が 後年の日差しも 雑踏さえも 静寂に変える
叙るの秋空模様

光りは万華鏡の迷路の様、雲りは汗を拭いた常緑樹の曇り
確かた事は季節がセンチな僕等に何かを伝えたから...」

「イブの肌ざらいに染った紅葉が スケルトンの並木に浮かぶ、」

イブらの落葉の黄金の絨毯に 想いが 寝入り

木霊ある さわめきに 振り向いた風景が

静かに切り裂かれた様な空気と、いづか重く下れた日差しを琥珀色に
秋が落ちたる 心臓を抱きしめて 過ちて行く

閃きは消える夢想の詩に 首を踏めて 冬が来る

暮れゆく 晩秋の セレナータ...」

講評（星野）

こちらも路上ならぬ紙上ライブ、曲は読者おのおので想像してください。秋の公園や街角の様子が、木々の姿を中心に、絵画のように描かれていますね。色づき始めてから次第に色を濃くし、散って行って冬になるまでが、早回しの映像のように目に浮かびました。「スケルトンの並木」という表現が気に入りました。四季それぞれのバージョンがあるのでしょうか。